

ブラックマンタが住む神秘の島 Pohnpei

ミクロネシアの中でも、もっとも神秘的な島、ポンペイ。

陸には、海上都市のナン・マドールなど、謎に包まれた遺跡が残る。

熱帯雨林に覆われたこの島の海には、

他のミクロネシアではあまり見ることのできない、

ブラックマンタとの遭遇が期待できる。

Photo&Text **Takaji Ochi**

Special thanks **Phoenix Marine Sports Club, World Tour Planners**



ブラックマンタとの初遭遇は衝撃的だ。まるで黒いマントを着た異界からの使者のような容姿に心を奪われる

ミクロネシアの中でも、僕は特にこの島に強い思い入れを感じる。それは、もうかれこれ15年以上前、初めて自分の意志で海外に潜りに行く地として、ポンペイを選んだからだった。初めてポンペイを訪れた時、狭い滑走路に着陸するために島の周囲を旋回する飛行機の窓から目にした島々を覆い尽くす熱帯の密林と、この島の象徴であるソケースロックは、まだ今のように旅慣れてない僕の感受性を大いに刺激してくれた。「この島には、何かがある」。そんな期待感を抱かせてくれるに十分なこの岩山の偉容は、以来、僕の理想とする南の島のイメージの中でも、常に象徴的な存在と

して心の中にあった。

そして10年程前、作家の池澤夏樹さんが著した児童文学小説「南の島のティオ」に出会った。そこには、まさに僕が思い描く南の島のイメージの一部が凝縮されていた。架空の島で起きる不思議な出来事を綴った小説だが、一度訪れた人であれば、ポンペイがこの島のモデルになっているのがわかるだろう。小説の中でソケースロックは克蘭ボク山と名前を変えている。本の中の10編のお話は、それぞれに神秘的で魅力に満ち溢れている。モデルとなった島を知っているからこそ、さらに神秘性が増すというのも、ポンペイ

が実際に持つ不思議な雰囲気のせいだろう。

以来、増々僕の中でポンペイに対する思いは、募っていった。毎年訪れるマーシャル諸島に向う機内から、いつも目にしていたこの島の風景は、他の南の島とは違う憧憬を僕に与えてくれた。

そして最初の訪島から16年目にして、この島を再び訪れる機会を得た。取材前にこれ程ワクワクした気持ちになったのは久しぶりだ。それは、一緒に潜り慣れた親しいガイドたちに会えるとか、初めての地に潜りに行くとか、そういったたぐいの期待感とはまったく違うものだった。

憧れの島

my long yearned - for Island

これが、僕の憧れの風景。ソケースロックのシルエットは、アゴを突き出して空を見上げる女性の横顔のようにも見える

ブラックマンタとの遭遇

ポンペイでは、約3割のマンタがブラックマンタ。
ミクロネシアでのブラックの個体数の多さでは、郡を抜いている

Encounter with Black Manta

マンタロードのクリーニングステーションには、複数のブラックマンタが連なって姿を見せる事もある

ブラックマンタが住む神秘の島 Pohnpei

www.web-lue.com

Web-lue 2006. Spring

 Information Link <http://www.wtp.co.jp/>  情報HPへジャンプ

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



Encounter with Black Manta

ブラックマンタが頭上をかすめる。ノーマルのマンタには感じない迫力を感じる

ブラックマンタとの遭遇

ポンペイは、ミクロネシア連邦の首都がある島で、ヤップ、チューク、コスラエと合わせた4州から構成される諸島国家だ。グアムからは東南東に約1600km。コンチネンタルミクロネシア航空のアイランドホッピング路線でチュークを経由して2番目に降り立つ。

僕が最初に訪れた頃は、パラオと覇権を争う程に、日本からのダイバーが多く訪れていた海だった。一時期は島に5~6軒あったダイビングサービスも、今では老舗のフェニックスの他は、ザ・ビレッジというリゾートがひっそりとオペレーションを行っているに過ぎない。まあ、ビレッジの方はダイビングというよりはスノーケルのお客さんを案内している事が多いようだが。

「ダイビングサービスが少なくなった=海の魅力が無い」という訳では無い。逆に現地オペレーションが少ないということは、それだけ他のダイバーが潜っているというストレスを感じる事なく、ダイビングを楽しむ事ができるわけだ。ポンペイで人気のマンタ狙いのポイント、マンタロードは、東のアルー(Alohkapw Passage)と西のマント(Mwahand Passage)をつなぐ、裾礁内の狭いチャンネルだ。マンタがクリーニングにやってくる珊瑚の根は水深15m、チャンネルの幅は十数mしかなく、長さも約50mと短い。この狭いチャンネルにマンタを見に行くのだから、当然サービスは少ない方が良い。今ならば、オペレーションを行っているのはフェニックスだけだから、「My Manta」を堪能できる可能性が高い。僕が取材に訪れていた時も、ビレッジのボートがスノーケルのゲストを連れてきたのを2度程目撃しただけだった。

そして、何よりも、ポンペイでは、約3割のマンタがブラックマンタ。ミクロネシアでのブラックの個体数の多さでは、群を抜いている。この記事の取材時期は、10月。実際にはポンペイのマンタ遭遇高確率シーズンは11月からGWくらいまで。ベストシーズンには80%を超える遭遇率も、GWから10月までは50%程

に下がる。それでも50%と言えば、2回に1回の割合なわけだから、遭遇率としては決して悪いわけではない。

「時期が早いから、ブラックが出るかどうか...」と多少心配していたのだが、時間は短かったものの、ブラックマンタに遭遇することができた。ブラックマンタというと、「巨大で邪悪」なイメージだが、今回ポンペイで遭遇したブラックは、どれも意外とコンパクトサイズだった。サイズ的には中の中くらいか。

水面休息中も、マンタたちはこの狭い水路に捕食しに姿を見せてくれた。穏やかな屋下がり、ポート上でランチを食べていると、水面に上がってきているプランクトンを捕食するために、ポートからでもはっきりわかるくらいの水面下で、数枚のマンタが激しく泳いでいるのが見て取れた。水路が狭いから、ポートを移動しなくても、本当に目と鼻の先を移動していく。流れの上から向ってくるマンタの様子を確認しながら、スノーケルでエントリーしても楽々マンタが見れてしまった。楽々と書いたが、これはあくまで距離的な問題で、実際にはかなり流れが発生していたから、それに逆らってマンタを撮影に向うのは、かなり苦労したけど。また、コンディションの良い時であれば、ブイに止めたポート上から、クリーニングステーションにマンタがいるのかも簡単に確認できた。

とにかく、撮影をする上で、他のダイビングオペレーションが無いということほど、気楽な事は無かった。普通なら、他のダイバーを気にして、アプローチに躊躇する事も多いが、今のポンペイでは当然の事ながら、そんな事は一度も無かった。



白と黒のマンタが捕食にやっけて、水面下を激しく泳ぎ回った

ブラックマンタが往く神秘の島 Pohnpei



群れの豊富な チャネルダイブ

channel diving

- 01. パルキルにエントリーするなり、ギンガメアジの群れに巻かれてしまった
- 02. バラクーダの群れも、いくつかのポイントで遭遇することができた
- 03. どのチャネルを潜っても、グレーリーフの姿を目撃した。時には40匹以上の群れとなって僕を驚かせた
- 04. 嵐のように現れて、嵐のように去って行く、昔どこかで聞いた歌の歌詞のような出現の仕方をするツムブリたち



島を取り囲むバリアリーフ(裾礁)には、内湾と外洋をつなぐ、いくつものチャネルがある

ポンペイでは、マンタロード以外では、裾礁に数多くあるチャネルの外洋からの入り口を横切りながら潜るダイビングが多かった。潜ったのは、パルキル、タワーク、パーランといった定番のチャネルポイントだ。特にパルキルは、ボートで港から15分と近く、しかもポンペイでも随一の群れ、大物ポイントでもある。透明度の悪いマンタロードとは違って、潮止りか、多少のインカレント時に潜るので、透明度も高い。

エントリーするなり、ギンガメアジの群れに巻かれ、チャネルを横切りながら、ツムブリ、ミナミイスズミ、

マダラタルミ、オオメカマス、ウメイロモドキなどの群れに遭遇。丁度チャネル中程のブルーウォーター側には、グレーリーフシャークが40匹以上群れていた。スチールでの撮影は困難だが、ビデオであれば、透明度も高いので、なんとか撮影できた。しかし、撮影時の深度は40m。潮の状況によっては、チャネルのリーフトップまで上がってくるそうだが、逃げ足も早い。あまり深追いはしない方が良さそうだ。

タワーク、パーランなどもチャネルの規模や深さの違いこそあれ、同じようにギンガメアジやバラクーダ

の群れやイソマグロなどの大物回遊魚などが堪能できる。それにどのチャネルを潜ってもグレーリーフシャークの群れに遭遇したのには驚いた。

ヘルフリッチ、アケボノハゼなどのアイドル系は、パーランの水深30m付近に多く生息していた。同じように群れが堪能できるポイントが多いので、ここではマクロに集中してみるのも良さそうだった。もちろんマクロ撮影を終えれば、ここでも群れや大物を堪能することができる。

ブラックマンタが往む神秘の島 Pohnpei



01



02

01. バードアイランドの強烈な透明度と、元気なサンゴたち
02. 白くて美しい、アンツ環礁内の無人島のビーチ

Solitary island atoll

ブラックマンタが往む神秘の島 Pohnpei

ポンペイの海のもう一つの魅力は、アンツ、パキンなどの離島環礁へのダイビングにある。海が穏やかになる夏の時期には、これら離島環礁へのダイビングが可能な日が多くなって来るはずだ。「南の島のティオ」の中では、それぞれアンス、トーラス環礁として登場している。アンツ、パキンともに、ボートで約60分の距離だが、外洋を走る距離はパキンの方が長く、外洋での波風の影響を受けやすい。

今回はアンツ環礁まで足を伸ばす事ができた。最初に潜ったのは、アンツでも一番遠い側にあるバードアイランドの外洋サイド。透明度の高さは、ポンペイ周辺のポイントの比ではない。ミクロネシアンブルーのクリアウォーターの中に、無数の珊瑚が、深海まで落ち込むドロップオフのリーフトップを覆いつくして、足の踏み場も無い。ここでは、カラフルな珊瑚

まるで山間の湖のように、まったく波がない環礁の中で、ゆっくりと走るボートが作り出す波紋が連なり、不思議な風景を見せる



の森の上を浮遊する癒しのダイビングを満喫した。大物との遭遇は無かったが、以前はここでジンベエザメに遭遇した事もあると聞いた。

アンツ環礁唯一のチャネル、ティップパッセージでのドリフトダイビングを楽しんだ後、このチャネルを通過して環礁内に入った。外洋のうねりもなく、ベタ凪ぎのラグーンは、まるで山間の湖のような静寂に包まれていた。初めてポンペイを訪れた時も、この環礁に潜りに来た。その事も覚えているのだが、当時は、外洋を越えて、はてしなく遠い別の島へ辿り着いたような感覚だった。それは、旅慣れていなかったせいもあるし、まったく予備知識も無いままに連れてこられたからというもあるだろう。今では、取材する立場でもあるから、予備知識もまったく無いままに訪れるということも無くなった。しかし、あの当時の何もかもわからずに、ワクワクしていたような気持で旅するのも悪くはなかったなど、感慨深気に環礁の中の無人の島々を見渡していた。

これからは 離島環礁への 遠征シーズン



離島環礁でのランチは無人島に上陸して楽しむ

ここに別世界への入り口が
存在するといふ言ひ伝ふもあやふしう

神秘に
満ち溢れた島

Mystic island

ナン・マドールの波避け用の岩と言われるこの石積みの方こうの海には、磁場がおかしい場所もあるという



01



02

- 01. ナン・マドールの人工島の間には、海水の水路が縦横無尽に走っている
- 02. はたして、こんな小さな南の島で、大昔にどうやってこの石組みを作ったのかと疑問に思う人も多いだろう。
- 03. 半屋として使用されていたと考えられている。岩で囲われた小さな空間がある
- 04. ナン・マドール遺跡の近くにあるケブロイの滝も、神秘的な様相を見せてくれる
- 05. ある山の山頂にある玄武岩の巨大な一枚岩の上には、いつ彫られたのかもわからないペトログリフが多数刻まれている
- 06. ポンペイでは、神聖視されている巨大ウナギ
- 07. 岩に変えられた女性だと言われているこの岩の形は、女性性器を表しているという



05



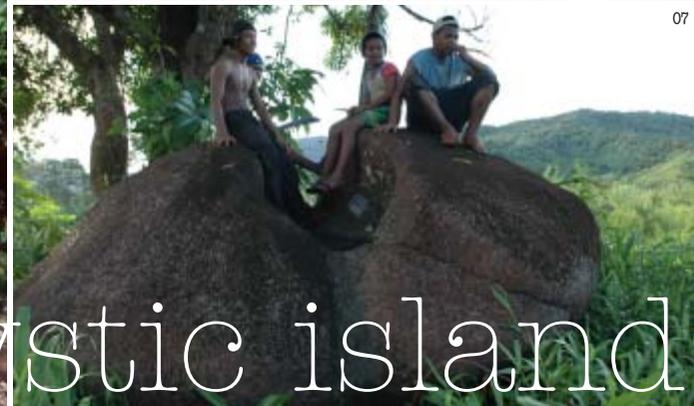
06



03



04



07

神秘に 満ち溢れた島

Mystic island

この島には、本当に神秘的で不思議な場所がいくつも存在する。その代表的な場所が、島の南東にあるナン・マドール遺跡だ。これも「南の島のティオ」の中では、グラガルーギナの遺跡として登場している。約1200m X 600m、約70haの土地に、玄武岩でできた92の人工島が存在する。島々の間には、海水の水路が走る、小さな南の島にしては巨大過ぎると言っても過言では無いほどの海上文明都市跡だ。この遺跡の建造は、西暦500年代に始まり、1500年代中期まで続いたと推定されている。

この遺跡の建造は「マジカルパワー」によって、空中に石を飛ばして石組みを造ったという伝承がある。こ

の場所にいると、そんな話にも妙に信ぴょう性を感じてしまう、不思議な気分させられる。ナン・マドールとは「中間の場所」を意味するとも言われ、ここに別世界への入り口が存在するという言い伝えもあるという。現世と別世界との間の場所という意味なのだろう。

ある山の山頂の巨大な一枚岩の玄武岩上には、いつの時代に彫られたのか、定かではない、剣、人、月、太陽、足跡、魚などのペトログリフが彫られている。

階段状の玄武岩の岩肌を露呈するケブロイの滝には、巨大なウナギが住んでいて、島の人々はそのウナギを神聖視しているなど、陸上にも興味を引かれる話がいくつかある。ダイビングのできない最終日などを利用

して、これらのスポットに足を伸ばすダイバーも少なくは無いという。山間部の年間降水量は世界一。その豊富な雨量のおかげで、ジャングルが潤い、多くの滝が点在している。豊潤な水が、島の神秘性を増すのに一役買っていることは間違いない。

僕は、「南の島のティオ」という小説に出会った事で、ポンペイに対する憧憬を期待以上に増幅させた。たまりに溜まったその思いを、今回の短い滞在で満足させる事はできなかった。もっともこの島と海の事を知りたい。そんな思いを引きずりながら、この島を後にした。

ブラックマンタが往く神秘の島 Pohnpei

Hotel



サウスパークホテル

フェニックスご用達のホテル。部屋のバルコニーからはソケースロックの全容が見渡せる。「南の島のティオ」の主人公の少年が働いているホテルのモデルになっている場所だろう。日本人マネージャーの菅沼保さんがいるので安心だ。客室数30。エアコン、冷蔵庫、電話、テレビ、シャワー完備。敷地内にはソケースロックが眺望できるレストランが併設。



ザ・ビレッジ

アメリカ人オーナーが、極力自然に溶け込んだリゾートを目指し、この島の伝統様式をいかしたナチュラルタイプのコテージで造られたポンペイ唯一のリゾート。部屋にはクーラーもテレビも無い。しかし、窓ガラスも無く網戸だけの窓から吹き込む海風が、心地良い。ウォーターベッドには、虫避けの蚊帳が設置されている。海に沈む夕日やソケースロックを見渡せるレストランが人気。



Diving Service



フェニックス

現在、ポンペイで唯一のダイビングサービス。トイレ付き55ftのクルーザー1隻、33ftのスピードボート2隻を駆使してダイビングオペレーションを行っている。現地常駐の諏訪さんは、職人気質の根っからのダイビングガイド。ポンペイ歴は、今年で5年目。敷地内には、ダイバーの宿泊可能で安価なクラブハウスがある。ダイビング三昧したい人にはお進め。



sightseeing

スペイン砦跡

アルフォンソ砦とも呼ばれている。この砦は1887年に起こったポンペイ人のスペイン人に対する反乱の後に建てられ、その後、知事公邸、病院、政府施設などに利用された。現在はアーチ型の門と玄武岩の塀の一部だけしか残されていないが、かつてはレンガとモルタルで出来た長い砦だった。

ドイツ鐘楼・カトリック教会

コロナアで最も絵になる史跡の一つ。スペイン砦の裏手に教会の鐘楼が建っている。教会は1886年に初代スペイン人知事とともにやって来たカプチン会修道士6人によって建てられ、その後ドイツ時代にドイツ政府によって教会の一部として鐘楼が建てられた。しかし、教会は太平洋戦争中の1944年に日本軍によって破壊されてしまい現在は鐘楼だけが昔の面影を残している。

カビンガマランギ村

ポンペイのおみやげと言えば、ブラックベッパーとカビンガマランギ村の木彫りのサメイカなどのハンディークラフト。これは、カロリン諸島にあるカビンガマランギ島から移住してきたポリネシア系住民が住む村で木彫り職人たちによって作られている。工房も見学できるので、人気の観光スポットにもなっている。



島情報

Information

Restaurant



サマーパレスレストラン

2005年にオープンした中華レストラン。味付けが濃過ぎず、日本人の味覚にあって食べやすい。2階には宴会用の小ルームがいくつかあり、カラオケ設備もあって、グループでのダイビングトリップの打ち上げなどにも利用可能。



セレストラン

胡椒農園を所有する日本人オーナー、植本盛さんのお店。ブッフスタイルが基本で、いくらかでもおかわり自由なのは、大食いの人には嬉しい。和食のメニューもあり、日本人ダイバーには人気。ポンペイのブラックベッパーは世界的にも評価が高く、人気のおみやげの一つになっている。

ブラックマンタが住む神秘の島 Pohnpei



アオマスク、ハタタテハゼ、クダゴンベ、ヘルフリッチなど定番のアイドルフィッシュも多い



フェニックスがボートを停泊する港。目の前にはソクエースロックがそびえる



パルキル

一番人気が高くダイナミックな チャンネルスポット。港から約20分の近さにありながら、大物、回遊魚が満喫できる。カレントの状態によりドリフトダイブも楽しめる。見れる魚は50匹以上のグレイリーフシャークの群、ギンガメアジの群れ、インドオキアジ、クロヒラアジ、カマス、バラクーダなどの群れ、イソマグロなどの回遊魚。時にはマンタが見れることもある。水深は30mで潮の流れも速い。

タワーク

ここもチャンネルスポットで回遊魚狙いのポイント。パルキルと似た様な地形をしているが水深は20mと浅い。グレイリーフシャーク、ギンガメアジ、バラクーダの群れ、ツムブリ、イソマグロ、ロウニンアジ、ナポレオン等の回遊魚。マダラトビエイもよく見られる。一年中静かなポイント。ボートで30分。

パーラン

バラクーダ、ギンガメアジ、サメの群れも狙い目だがヘルフリッチ、アケボノハゼなどマクロ系のアイドルフィッシュも確実に見られる。水深も30m位に数個体生息している。マクロカメラ派にはお薦めのポイント。ボートで約40分。

マンタロード

ポナペと言えど”マンタ”。インリーフにあるスポットで(12月～5月)のマンタ遭遇率は80%ほど。しかも珍しいブラックマンタを含めて10匹以上がクリーニングステーション上や、捕食で乱舞する事もある。水深は15m。マンタを待っている間は砂地やリーフでガーデンイール、オウゴンニジギンボ、モンツキカエルウオなどの小物マクロ系を見る事ができる。ボートで25分。

パルキルランデブー

パルキルとタワークの中間の外海にある。透明度もよく水深15～20mのドロップオフに沿ってドリフトする事が多い。サンゴの種類も多くキャベッジコーラルも見れる。メジロザメやギンガメアジの群れは頻繁に見れ、バラクーダ、ツムブリ、マダラトビエイなどにも遭遇するポイント。

サブチック

ボートで10分。外洋のマクロポイント。水深30～40mには、ヘルフリッチとアケボノハゼの群生地になっている。その他、アオマスク、スミレナガハナダイ、マルチカラーエンジェルフィッシュなどのアイドル&レア系マクロも豊富。

ティップパッセージ

アンツ環礁唯一の水道口。見渡す限りのエダサンゴ、テーブルサンゴ、アザミサンゴに覆われサンゴの間には小魚も多く、花吹雪の様に舞っている。また、ギンガメアジの群れ、メジロザメ、イソマグロなどの大物も見られる。ボートで約70分。

パードアイランド

これもアンツ環礁にある外洋側のサンゴ群生ポイント。透明度も高く、美しいサンゴの上を浮遊する癒し系ダイビングが堪能できる。ボートで約70分。

ユースケポイント

バキン環礁にあるボンベイNo1ポイント。エントリーした途端、ブルーの中に海底から垂直に切り立つ隠れ根がくっきり見え、地形派ダイバーなら狂喜する事間違いなし。バラクーダ、ギンガメアジの群れが隠れ根の廻りを取り囲み埋めつくす。その他にもイソマグロ、ロウニンアジ、カマスの群れも良く見らる。サンゴも黄緑色したキャベッジコーラルが群生して青い海とのコントラストが美しい。隠れ根のトップで24m。根の上につかまって見るのが通常のダイビングパターン。貿易風が弱まる5月～11月頃がベスト。ボートで80分。

Point Guide

ブラックマンタが住む神秘の島 Pohnpei

神秘に 満ち溢れた島

もっともこの島と海の事を知りたい。
そんな思いを引きずりながら、
この島を後にした。

Travel Memo

- 国名:ミクロネシア連邦 ポナペ州
- ビザ:有効期限内のパスポートと復路の航空券を所持していれば30日以内に限り不要です。30日以内の観光はビザ不要
- 空港利用料:出国時に10ドルが現金にて必要。
- 気候:平均気温は28~9度。一年を通して日差しが大変強く、日焼け止めなどは通年必要。
- 言葉:公用語はポナペ語と英語。島民同士の会話はほとんどがポナペ語、政府機関などの公式書類は英語。また歴史上の経緯より、年輩の人には日本語を話せる人も居るが、観光客の行く場所では日本語は通じない。
- 通貨単位:USドル
- 両替:日本もしくは経由地でドルを用意しておく事が必要。
- 時差:日本との時差は+2時間。日本が正午の時、ポナペは午後2時。国内に時差はありません。
- 電圧:110V。プラグ形式も同じで日本の電化製品はそのままご利用頂けます。ただ、精密機械などには変圧器をおすすめします。
- 水:ミネラルウォーターを飲むこと。水道水は飲めない。
- チップ:ローカルの間にチップの習慣はありませんが、観光客はチップを置いていくのが一般的です。目安として、ホテルのベッドメイクに1ドル/回、レストランなどでの夕食ならテーブルに1~2ドルおいて置けば適当です。

島を離れる日、空にはフェニックス(不死鳥)のような形をした不思議な雲が浮かんでいた。何かを意図していたのだろうか

ブラックマンタが往く神秘の島 Pohnpei

www.web-lue.com

Web-lue 2006. Spring

 Information Link  情報HPへジャンプ
<http://www.wtp.co.jp/>

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配布および画像・文章の複製、二次使用を禁じます